

美術学科絵画専攻領域の研究指標

絵画専攻領域では、以下の「4つの表現の方向性」のプログラムによる構成に従い、履修者が自由に選択、組み合わせ、さらにその上で「表現の方向性」の場に所属することによって、研究指標での履修を行っていきます。

■ 絵画 a 「形・リアリズム」

絵画表現を軸とし、時代や社会に対する思考や感覚、感情などから想起するイメージを具象化し、具体性のある表現を模索する。学生自身が、主体性を持って選んだモチーフへの考察や、これまで形成された価値観への考察、関心のある社会的出来事、またそれに対する問題提起などを「形」に置き換え自身の感じる「リアル」について追求します。対象（事物や事象）をしっかりと観察する事で、学生自身のテーマや構想などの本質を見極める力を養う事が出来、それを基に制作をしていきます。

■ 絵画 b 「テーマと表現形式」

絵画表現を軸とし、学生自身のテーマと形式の関係性から表現を模索する。今日の絵画表現について、学生自身の主題・表現形式の変遷などの概念的要素と色彩・形態・マテリアル等の物質的要素がどの様な関わり合いをもって絵画を生成しているかを学びます。

これらを踏まえて、学生各自は自分のテーマに沿って、アイデンティティに立脚した自己表現を目指し、今日の表現における「絵画性」の意味について考察し、それに基づき制作します。

■ 絵画 c 「版」

絵画における間接表現や複製技術の関係を研究し、実践する場を「版」とします。この「版」には2つの方向性があります。版画の歴史的な意味と技法を習得し、版画特有の表現を深化させていく方向性。「版」の概念と手法を広く学び、様々な可能性を追求し表現の拡張を目指す方向性。2つの方向性の間を螺旋的に往き来しながら、古典から現代・実社会につながる美術表現を視野に入れ、自身の「版」を用いた表現を探求していきます。

■ 絵画 d 「超域表現」

自己の内部から湧き上がる根源的イメージをダイレクトに受け取り、そのイメージを、既成の手法に固定せず、平面や立体、空間表現や身体表現、音、言語、映像など、様々な表現メディアと関わらせる。その上で、表現としての固有性を尊重しながらも、そこで生み出される横断的で実験的なプロセスそのものを、作品の成り立ちの中核とし、既成の表現メディアへの固定的な枠取りや考えを超え、高度に複合、混合された「超域表現」を構築する。